

混沌とした中から

I T情報社会の進歩の中で (1)

I T情報社会が急速に進化、浸透してきています。ネットワークはいつの間にか常時接続があたり前になり、そのスピードもいつの間にか1 Mを超え、最終的な通信回線といわれてきた光ファイバーまでもが身近なものになってきています。そして、首都圏を中心にホットスポットと呼ばれる無線LANの使用できる場所も拡大してきています。そのうちに情報端末を持っていけば、いろいろな情報がどこでも手に入れることができるようになるようになります。確かに、携帯を使えば今でもいろいろな情報が使えるのですが、携帯と情報機器とでは情報の使い方も違いますし、携帯、携帯情報端末、パソコンとそれぞれにいろいろ使えるようになっています。が、便利になっているのですが、本当にそれだけで大丈夫なののでしょうか。安心しきって使っていますが、いろいろ危険がその中に紛れ込んでいそうで気になります。しかし、目に触れる情報は便利な面ばかりです。本当に大丈夫なののでしょうか。

I T情報社会といわれ始めて、いろいろなものが登場してきました。まず、大きなものとして「住民基本台帳ネットワーク」があります。導入され始めて2年がたち、今のところ大きな問題もなく過ぎているようです。といってもすべての自治体が完全に導入が完了しているわけではありませんので、本当の意味で導入されたといっているのか解かりません。それは、周りにどれだけ住民基本台帳カードを所持している人がいるかどうかだけでもわかります。ほとんどいないでしょうし、自分の自治体のカードがどのようなものかもわかっていない人がほとんどだと思います。どうでしょうか。実際、住民基本台帳ネットワークにはどのような効果があるのでしょうか。現在のところは、住民票を移動する場合に、これまでは元の住所に届けを出した上で新しい自由所に届けを出さなければならなかったものが、新しい住所に届けを出すだけで処理ができるようになっていました。また、住民票の交付が日本全国どこでもできるということになっています。今のところはこんなところですが、このカードで身分証明になるわけですから、いろいろな付帯サービスが各自自治体で考えられています。たとえば自治体の施設予約（公民館の部屋の予約など）や、図書館の貸出しカード機能の追加などがあるのですが、その他にも公立病院の診察カード、健康情報のカードなどへの利用が考えられています。確かに、身分証明になるわけですから、1つのカードにすれば便利だという考え方からです。便利になるという考えからは、他にもいろいろな機能をもたせることができるようには思うのですが、実際に便利になる半面いろいろな問題が発生すると考えられます。それは、住民関連のデータがすべて住民基本台帳番号で管理されるということから、万が一どこかでシステムに侵入された場合すべてのデータが漏洩する可能性があります。システムとしては、住民基本台帳ネットワークとその他のシステムを直接接続しないことになっているので、問題を小さくしようとしてありますが、それですべてが防げるのでしょうか。作り方を十分注意して作らないととんでもないことになるのですが、すべての自治体がきちんと対処しているかどうかは疑問の残るところです。大体きちんとした知識を持ったシステム担当者がすべての自治体にいるとは考えられません。データの管理などがどこまできちんとされているかについても疑問の残るところですし、そのような自治体に階層化されているといっても、全国統一のネットワークが入っているわけですから、悪意のある人物が直接自治体の端末からデータをダウンロードする方法が本当はないのでしょうか。疑問が十分あるように思います。 (次回へ続く)

(今週の情報誌から)

○日経パソコン 8月2/16日号

特集 撮りっぱなしは卒業

→デジカメはどう使っていますか。簡単に大量に使えるデジカメ、しかしどうすれば整理できて、よいアルバムが作れるかにはテクニックがある。せっかくソフトを使うならレタッチで修正したい。そのためにもデジカメ専用ソフトに整理はお任せにするなどがある。面倒だけれどもいつかははじめなければ。

特集 SP2がもたらす光と影

→Windows XPのSP2が登場する。セキュリティが甘いとされてきたWindowsに対するマイクロソフトの回答がSP2。ウイルス対策ソフトなどを見張るセンサーの導入、パーソナルファイアウォールを初期設定で有効に、IEとOutlook Expressのセキュリティ設定を強固に、セキュリティホールが悪用されない仕組みを用意の4点が主な改良点。多少使い勝手を犠牲にしてもセキュリティを強化したSP2。まったく別のWindowsと考えたほうがよいかもしれない。